

報道関係各位

2025.04

福田美術館／嵯峨嵐山文華館



万博・日本画繚乱 ー北斎、大観、そして翠石ー

かつて万博で世界を魅了した日本画家たちによる名品が大集結！

2025年4月より、大阪・関西万博が開催されています。これにちなんで、福田美術館・嵯峨嵐山文華館では、かつて万博に出品され世界を魅了した日本画家たちの名作を集め、二館共催で紹介します。

万国博覧会（万博）は、世界各国の最先端の科学や技術の粋を集めて開催される、世界最大の国際博覧会です。美術もまた、国を代表する先進的な技術だと考えられていた近代には、日本は国際的に認められるために国の主導で積極的に出品し、日本画の大家である葛飾北斎などの作品や、現役の日本画家たちの意欲作を万博に送りました。1900年のパリ万国博覧会では、日本画家として唯一金メダル(金牌)を獲得した大橋翠石（おおはしすいせき）をはじめ、橋本雅邦（はしもとがほう）や横山大観（よこやまたいかん）、竹内栖鳳（たけうちせいほう）や上村松園（うえむらしょうえん）ら、錚々たるメンバーの画家たちが日本の威信をかけて意欲的に制作し、賞に輝きました。

多くの場合、彼らの作品は貴重な外貨獲得のために万博を開催した国でそのまま販売されてしまったようで、現存しているものはほとんどありません。しかし、万博出品作に注がれた画家たちの熱情と画技は、他の代表作にも宿っています。

会期：2025年7月19日(土)～9月28日(日)

前期：7月19日(土)～8月25日(月) 後期：8月27日(水)～9月28日(日)

- 【主催】福田美術館、嵯峨嵐山文華館
- 【後援】京都府、京都市、京都市教育委員会、京都商工会議所
- 【会場】第1会場：福田美術館 第2会場：嵯峨嵐山文華館

第1章 万博と美術

約3年ぶりの展示となる大観の勇壮な「富士図」は約4mの大作



横山大観《富士図》1945年頃 福田美術館蔵 後期展示

万国博覧会（万博）の歴史は、日本では江戸時代にあたる1851年のロンドン万国博覧会から始まりました。「各国や地域が、誇るべき営みや技術について紹介し、進歩や将来への展望を示すことによって、得難い公衆の教育の機会とする」という国際博覧会条約の目的のもとに、いま、まさに大阪で万博が開催されています。

現代の万博で、各パビリオンや展示物に賞が与えられ、優劣が確定するようなことはありませんが、優れたものに意義を認め、顕彰することが進歩に繋がるという考えから、近代の万博では出品物が審査の対象となっていました。その中で、重要な部門として「絵画」がありました。「人間洗濯機」や「空飛ぶクルマ」のような先進技術と同じく、絵画もまた新たな時代と共に進歩していくべきものだと考えられていたということでしょう。

明治時代の日本は、文明開化からそれほど時が経過しておらず、産業技術で欧米に対抗して賞を獲得することは難しい状況にありました。しかし絵画であれば個人の才能によって賞を獲得することが十分に可能であると日本政府は考え、多くの日本画家の作品を万博の場に送りました。

第1章では、**ロンドン万博に展示されモネやゴッホに大きな影響を与えた葛飾北斎の肉筆浮世絵にはじまり、万博に出品し世界に挑んだ当時の日本の画家たちの作品を振り返ります。**



葛飾北斎《大天狗図》1839年
福田美術館蔵 通期展示

福田美術館：通期 40点 前期 10点 後期 14点 合計 64点
【作品点数】
※うち初公開：19点

第2章 万博連覇の幻の巨匠 大橋翠石の芸術

全国最多の翠石作品を持つ福田美術館での大規模展示



大橋翠石《瑞祥》1935～1943年
福田美術館蔵 通期展示



大橋翠石《月下猛虎図》19世紀
福田美術館蔵 通期展示



大橋翠石《金魚図》1925～1945年
福田美術館蔵 通期展示

日本画家・大橋翠石（1865～1945）は、日本美術史上、生前と現在の評価の差が最も激しい作家と言っても過言ではありません。翠石は1900年のパリ万国博覧会で迫真の虎の絵を出品し、日本人画家として唯一の金メダル（金牌）に輝き、さらに4年後のセントルイス万国博覧会でも連続して金メダルを受賞しました。結果、一躍明治時代を代表する巨匠として知られるようになり、その評価は昭和に入ってから東の横山大観や西の竹内栖鳳に匹敵するほどのものでした。

しかし現在、翠石の名はあまり知られていません。美術愛好家はもちろん、専門家でもほとんど作品を見たことがないことから「幻の巨匠」とも呼ばれています。それは彼の虚弱な体質や内向的な性格から、京都や東京ではなく岐阜や神戸に隠棲して、弟子をとらず、どの画壇にも属さなかったため、没後は研究者の注目を集めにくかったことが原因のひとつと考えられます。そのため日本全国の美術館で翠石の作品を所蔵しているところはほとんど無く、所蔵があっても1、2点のみの少数に留まっており、複数の作品をまとめて目にする機会はなかなかありません。福田美術館では、「誰もが感動する」作品を、というコンセプトのもと収集活動を展開してきた中で大橋翠石の芸術にも注目し、全国でも最多である21点を所蔵しています。

本展覧会では、その蓄積に加え、翠石の遺族やコレクターからも借用した名品を集め、西日本初となる、計25点の翠石作品が一堂に会する大規模展示を実施します。「乳虎之図」は、今回が初めての公開です。万博を舞台に花開いた、幻の巨匠による究極の写実的日本画を堪能できる貴重な機会です。

大橋翠石（1865～1945）

明治中期から昭和前期にかけて日本で活動した日本画家。1865年、美濃国安八郡大垣町内（現在の岐阜県大垣市）に紺屋（染物屋）を営む大橋家に生まれる。虎の絵を多く描き、パリ万国博覧会（1900年）において日本人で唯一の金牌を受けるなど欧米でも高く評価された。親族に大橋万峰こと実兄の大橋鎌三郎（日本画家）と娘婿で弟子の大橋翠邦（大橋翠峰）がいる。

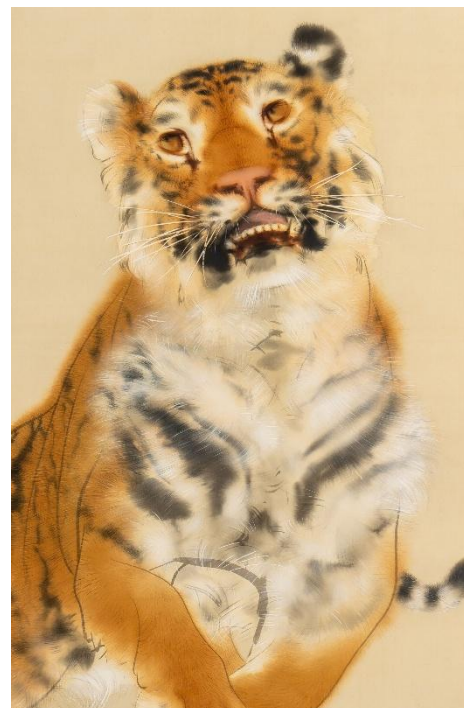
第3章 翠石がライバル？ 竹内栖鳳の芸術

近代京都画壇を代表する画家、栖鳳の芸術世界

第3章では竹内栖鳳の作品に注目します。
1900年のパリ万博では、97名の画家が腕を振った日本画の秀作134点が出品されました。日本画家として既に才能を認められ、京都画壇の第一人者として評価を受けていた竹内栖鳳も、当然出展作家に加えられていましたが、栖鳳の作品は銅メダルに留まり、金メダルに輝いたのは1歳年下の大橋翠石の《猛虎之図》のみでした。

この特別な機会に見聞を広めるためパリを訪れていた栖鳳でしたが、壮年期の彼にとって、翠石の金メダル受賞は衝撃であったに違いありません。帰国した栖鳳は、それまでの「棲鳳」の雅号の棲の字の偏を変えて「栖鳳」と名乗りました。パリでの体験が一つの転機となったことを物語っています。

虎の絵で翠石との差を感じた栖鳳は、パリ現地で動物園に通ってライオンを写生し、帰国後には「動物を描けばその体臭まで描く」と形容されるほどの注力を示しました。本展最後のパノラマギャラリーでは、ここ京都から万博に挑んだ画家の代表格・栖鳳の芸術世界を、《猛虎》（後期展示）・《獅子》（後期展示）の名品と共に振り返ります。



竹内栖鳳《猛虎》（部分）1930年
福田美術館蔵 後期展示

好評企画！火曜日の「喋っていいDAY！」対象曜日を「火・日」に拡大



福田美術館では、通常の展示期間中、展示室での会話を禁止していませんが、周囲への迷惑にならないようご配慮をお願いしています。そこで友人や知人、家族、恋人と楽しく感想を述べあったり、小さなお子様連れでも気兼ねなく美術鑑賞をしたいという方のために、毎週火曜日は全館「お喋りOK」とする「喋っていいDAY！」を2024年7月13日（土）から開始しました。「万博・日本画繚乱 一北斎、大観、そして翠石一」では、火曜日に加え日曜日にも対象とします。アートと一緒にコミュニケーションを楽しみながら、いつもよりほんの少し賑やかな美術館が体感できるユニークな取り組みです。
※大声で叫んだり、携帯電話で通話することなどはお控えください。



8月は小学生無料

夏休みを機に想像力、表現力など豊かな感性を育むきっかけとなればという思いから、福田美術館では、2025年8月の1ヶ月間、小学生（13才未満）の入館料を無料とします。
※但し保護者の同伴が必要です

第1章 万博と画家

万博で国際的な評価を受けるための戦略

各国が賞を競い合ったかつての万博で、当時の日本政府は好成績をおさめ、国際的な地位を高めたいと考えていました。そのとき、どんな戦略があったのでしょうか。

最初の戦略は、すでに国内で名声を確立していた巨匠に出品を要請することでした。戦前の日本には宮内省が選出する帝室技芸員という制度があり、これは現代の文化勲章に匹敵する芸術家として最高の栄誉でした。政府はまず東京の橋本雅邦、京都の今尾景年のような伝統を継ぐ技芸員たちに入賞を期待したのです。

次に、明治時代の中頃から頭角を現し、西洋の潮流をも取り込んで次々と話題作を描いていた、横山大観や竹内栖鳳たち次世代の有望作家にも大きな期待を寄せて依頼しました。

ベテランの円熟、中堅の気概という二つの要素のどちらが当時の審査員に感銘を与えたのかは、作家解説に掲載している万博での受賞歴が物語っています。長老作家と中堅作家それぞれで異なる作品の魅力を比較するのも一興です。



横山大観《月明》（部分）1897年
福田美術館蔵 前期展示

第2章 当時新進気鋭の画家と翠石

万博で大活躍した新人画家たち

万博では、中堅の栖鳳の弟子、上村松園やその同世代にあたる平井樞仙（ばいせん）なども力作を出品しています。

万博という特別な場に挑んだ日本は、今までそれほど受賞歴はなくても、万博の開催国で人気を博す可能性があった新人たちにも積極的に門戸を開いていました。

結果、新人たちの中で欧米の人々を感動させ、1900年のパリ、1904年のセントルイスでの万博で連続金メダルに輝いた大橋翠石こそ、万博に最も愛された日本画家と言えるかもしれません。彼の作品は「私はその作品を忘れることができない」「パーフェクト・タイガーだ……」と現地のマスコミにも投書が寄せられるほどの人気を集めました。

関西で翠石の作品がこれほどの数展示されるのは、没後初の機会です。翠石の代名詞である虎をモチーフとした作品は福田美術館、嵯峨嵐山文華館それぞれで展示されます。

また、同じく万博で活躍した画家、野沢如洋（のざわじょよう）の貴重な作品や、下村観山（しもむらかんざん）の《海浜乃曙》なども展示します。



上村松園《人形遣之図》（部分）20世紀
福田美術館蔵 後期展示

【作品点数】

嵯峨嵐山文華館：通期 11点 前期 13点 後期 14点 合計 38点
※うち初公開：13点

プレス用画像（福田美術館展示）

※広報画像は以下の申請フォームよりダウンロードいただけます。

<https://tayori.com/f/banpaku/>

※トリミング可。その場合キャプションに（部分）と表記



①横山大観《富士図》（左隻）1945年頃 福田美術館蔵 後期展示



②横山大観《富士図》（右隻）1945年頃 福田美術館蔵 後期展示



③望月玉溪《瑞鳳ノ図》（左隻）1928年 福田美術館蔵 通期展示



④望月玉溪《瑞鳳ノ図》（右隻）1928年 福田美術館蔵 通期展示



⑤葛飾北斎《大天狗図》
1839年
福田美術館蔵
通期展示



⑥大橋翠石《瑞祥》
1935～1943年
福田美術館蔵
通期展示



⑦大橋翠石《月下猛虎図》
19世紀 福田美術館蔵
通期展示



⑧大橋翠石
《金魚図》
1925～1945年
福田美術館蔵
通期展示



⑨竹内栖鳳《猛虎》1930年
福田美術館蔵 後期展示



⑩葛飾北斎《砧美人図》
1811～1820年
福田美術館蔵 通期展示



⑪上村松園《和楽之図》
1897～1906年
福田美術館蔵 通期展示



⑫渡辺華山《于公高門図》
1841年
福田美術館蔵 前期展示
重要文化財

プレス用画像（嵯峨嵐山文華館展示）

※広報画像は以下の申請フォームよりダウンロードいただけます。
<https://tayori.com/f/banpaku/>

※トリミング可。その場合キャプションに（部分）と表記



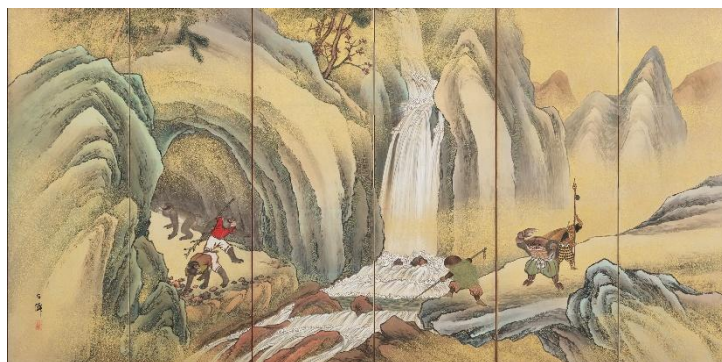
⑬横山大観《月明り》
1897年 福田美術館蔵
前期展示



⑭上村松園《人形遣之図》
20世紀 福田美術館蔵
後期展示



⑮葛飾北斎《墨堤三美人図》（部分）19世紀 福田美術館蔵 通期展示



⑯鈴木松年《昔話猿蟹合戦図屏風》19世紀
福田美術館蔵 通期展示

展覧会概要

- 企画展名 「万博・日本画繚乱―北斎、大観、そして翠石―」
- 会 期 2025年7月19日(土)～9月28日(日)
前期：7月19日(土)～8月25日(月)
後期：8月27日(水)～9月28日(日)
- 開館時間 10:00～17:00 (最終入館 16:30)
- 休 館 8月5日(火) 9月9日(火) 設備点検
8月26日(火) 展示替え ※嵯峨嵐山文華館のみ、9月18日(木) も休館
- 主 催 福田美術館、嵯峨嵐山文華館
- 後 援 京都府、京都市、京都市教育委員会、京都商工会議所
- アクセス
 - 第1会場／福田美術館
〒616-8385 京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16
JR山陰本線(嵯峨野線)「嵯峨嵐山駅」下車徒歩12分／阪急嵐山線「嵐山駅」下車徒歩11分／嵐電(京福電鉄)「嵐山駅」下車徒歩4分
 - 第2会場／嵯峨嵐山文華館
〒616-8385 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町11
JR山陰本線(嵯峨野線)「嵯峨嵐山駅」下車徒歩14分／阪急嵐山線「嵐山駅」下車徒歩13分／嵐電(京福電鉄)「嵐山駅」下車徒歩5分
- 料 金

	一般	高校生	小・中学生	その他
福田美術館	1,500 (1,400) 円	900 (800) 円	500 (400) 円	* 障がい者と介添人1名まで各900 (800) 円 * 幼児無料 * () 内は20名以上の団体料金
嵯峨嵐山文華館	1,000 (900) 円	600 (500) 円	400 (350) 円	* 障がい者と介添人1名まで各600 (500) 円 * 幼児無料 * () 内は20名以上の団体料金
二館共通券	2,300円	1,300円	750円	* 障がい者と介添人1名まで各1,300円

プレスリリース／広報用画像に関するお問合せ

福田美術館／嵯峨嵐山文華館広報事務局 (共同ピーアール内)
 担当：田中真衣、樋口
 TEL：03-6264-2045
 Email：fukudamuseum-pr@kyodo-pr.co.jp

一般の方からのお問合せ

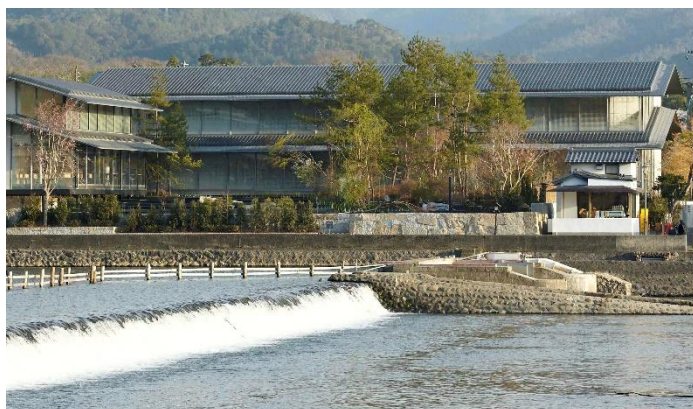
福田美術館 TEL：075-863-0606 (代表) Email： info@fukuda-art-museum.jp
 嵯峨嵐山文華館 TEL：075-882-1111 <https://www.samac.jp/contact/>

福田美術館について

美しい自然と日本美術の融和。日本文化の新たな発信拠点として

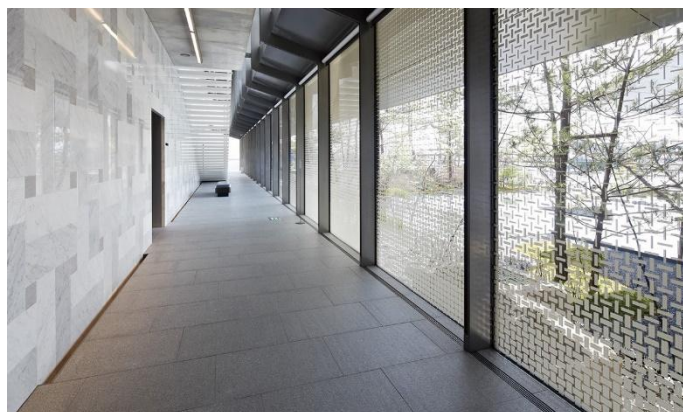
京都・嵯峨嵐山は古来歌枕でもある場所で、多くの貴族や文化人に愛され芸術家たちが優れた作品を生み出す源泉となってきました。オーナーである福田吉孝は京都に生まれ育ち、そこで事業を興し、今日まで続けてきたことに対し、地元の方々のご支援とこの地に恩返しをしたいという想いから、2019年10月、美術館の設立に至りました。今や日本国内だけでなく、世界中から多くの人々が訪れる観光地である嵐山。その中でも渡月橋を望む大堰川（桂川）沿いの景勝地に位置し、四季折々にそれぞれに変化する風景は1000年変わらず人々を魅了してきました。この美しい自然と共に日本美術の名品を愉しんでいただくことで、嵐山が世界有数の文化発信地となることを願います。

福田美術館は2024年10月で開館5周年を迎えました。今後も「100年続く美術館」をコンセプトに、現代まで受け継がれてきた日本文化を次世代に伝え、さらなる発展へとつなぐ美術館を目指します。



嵐山にふさわしい、未来へむけた日本建築の形

福田美術館の建築を手掛けた安田幸一氏は、「蔵」をイメージした展示室や外の自然とのつながりを感じられる「縁側」のような廊下など、伝統的な京町家のエッセンスを踏まえつつ、これから100年のスタンダードとなるような新しい日本建築を目指しました。また、庭には大堰川に連なる水鏡のごとく嵐山を映し出す水盤が設けられており、渡月橋が最も美しく一望できるカフェからは最高の眺めを味わうことができます。



嵯峨嵐山文華館について

百人一首の歴史と日本画の粋を伝えるミュージアム

1000年以上も前から歌枕として詠まれ、愛されてきた嵯峨嵐山の風景。当館はこの地で誕生したと伝えられる百人一首の歴史やその魅力と、日本画の粋を伝えるミュージアムです。石段を上がり、冠木門をくぐって足を踏み入れると、春はしだれ桜、初夏はサツキツツジ、秋は紅葉、冬は冠雪と、四季の美しさを楽しめる石庭。百人一首ゆかりの小倉山を背にし、大堰川を借景として取り込む2階からの眺めは、まさに日本画の世界のようです。



1階の常設展示では100体の歌仙人形（フィギュア）と歌の英訳が並び、藤原定家によって百人一首が撰ばれた時から昨今人気の競技かるたに至るまでの変遷をご紹介します。また120畳の広々とした2階の畳ギャラリーでは、じっくり座って自由に鑑賞することも可能。石庭を望むテラスにはカフェスペースが設けられており、景色を楽しみながらお寛ぎいただけます。

